

## イデオロギーとしてのヤポネシア論 — 試論 —

浜川 仁

### 要 旨

作家の島尾敏男によって考え出され、民俗学者の谷川健一によって発展させられた「ヤポネシア」の概念は、1972年本土復帰直前の沖縄で、新川明や川満信一や岡本恵徳などが「反復帰論」を主張しはじめるさきがけとなり、復帰後沖縄が独自のアイデンティティを形成するのを思想面から支えたともいえる。小論では、沖縄の土着文化を積極的に評価しているように見えるヤポネシア論もまた、いまだ「中央／辺境」という二項対立にとらわれており、村井紀が「南島イデオロギー」と呼ぶ、近代国家日本のイメージによる支配構造に深く関与するものであることを浮き彫りにする。特に、反復帰論者の一人岡本恵徳の「沖縄の思想」をめぐる考察に、谷川健一の思想があたえた影響を批判的に分析する。

### はじめに

沖縄は表象の海に浮かんでいる。もしポスト・モダニストたちのいうように、表象が現実在先立ち、新たな「リアリティ」をうみだしていくものだとすれば、沖縄ほど両義的なリアリティに満ちた場所は日本には他にないだろう。今年年間観光客数500万人を突破したツーリズムの隆盛は、この表象が人びとの欲望へ与える作用をぬきにしてはどうてい考えられない。ざわめきあう表象の力が、沖縄経済そのものをささえているのである。

他方、「オキナワ」イメージの氾濫に、県内の識者たちは近年ますます批判的になりつつある。批評家の新城郁夫は、沖縄にまつわる数多くのイメージが実は「ねつ造された」ものであるといい、「沖縄の人がそれを受け入れて、むしろ自分自身で沖縄人を演じていく」と批判している<sup>1</sup>。また、「沖縄—ディストピアの文学」と題する座談会では、米文学研究家の喜納育江も「自分達が主体的に発していると考えながら声を発するんだけど、それがいつのまにか外の構造にからめとられてしまって、気がつけば消費されている<sup>2</sup>」と、今日の沖縄の状況をまとめ、「思わぬ方向に消費されてしまう構造が、90年代の読む者、聞く者との関係の中で再生産されている<sup>3</sup>」と語っている。

こうして、表象するがわもされるがわも、一抹の違和感をかかえながら、かといつていつまでも表象の空間からぬけだすことはできないのであるが、こうした状況はなにも今日始まったことではない。村井紀が民俗学を批判し著した『新版 南島イデオロギーの発生』

を読むと、近代の初めから沖縄と本土は互いを鏡に自画像を描き続けてきたことが分かる。村井は、政治文化的な他者への執着としての「オリエンタリズム」(エドワード・サイード)を「愛情による支配の物語」<sup>4</sup>であると簡潔にまとめ、柳田国男や折口信夫らの押しすすめた日本民族学が、実は大日本帝国のナショナリズムや植民地主義を黙認しつつ、これを底辺で支えるものであったと論じている。また、復帰前に急速に沖縄の識者の間に広まり、反復帰論の形成に大きな影響を与えた島尾敏雄と谷川健一のヤポネシア論についても、日本という近代国家が、南の島々にたいしていつでも抱いてきたあこがれと支配欲がないまぜになったオリエンタリズムにつらぬかれていたと言う。こうして、歴史を振り返ると、時代と政治状況の中で、沖縄を表象するやりかたが大きく変わってきたことに気づかされる一方で、沖縄の人びともまた時代の岐路でいつも自分たちにとって有利なようにセルフ・イメージを選択してきたことに気づかされる。

小論では、島尾が想起し、谷川による理論的展開を見たヤポネシア論を批判的に検証し、この論の国家社会イデオロギーとしての側面に光をあてていきたい。特に、谷川が1970年元旦に日本読書新聞で発表し、復帰直前の沖縄の知識層に大きな影響を及ぼした論考「ヤポネシアとは何か」に着目し、これが、反復帰論者のひとり岡本恵徳に受け入れられ、「沖縄の思想」として土着思想的発展をとげたように見えながら、いかに国家イデオロギーとしての機能を保ちつづけたかを検証する。

### 「日本」という空虚な記号

その前に、少し遠回りになるかもしれないが、そもそもなぜ国家社会にとってイデオロギーが必要となるのかについて、よく口にされる「社会は存在しない」というテーゼをめぐる短い考察を試みよう。このテーゼがいわんとしていることは要するに、わたしたちは、複雑で葛藤にみちた人間集団のいとなみにたまたま「社会」ということばをあてはめ、説明した気になっているだけで、ほんとうはこれにストレートに秩序だった表現を与えることは不可能であるということだ。「社会」とは、実は内容のないからっぽの記号にすぎないのである。

「社会」——あるいは「世界」——というような究極の全体概念が、理性でとらえることのできないものであることは、18世紀ドイツの哲学者イマニュエル・カントによって、すでに「アンチノミー」と呼ばれる「二律背反」のパラドックスを用いた一連の論証を与えられている。カントによれば、世界は、時間的にも空間的にも、有限であるとも言えないし、また無限であるとも言えない。これは、単に、情報不足で今のところ検証できないというようななまやさしいものではなく、そもそも世界というものが、わたしたちの理性が、「とき」や「ところ」と結びつけて考えるような広がりを持たずに存在しているということである。すなわち、世界には、まず「大きさ」というものがない。

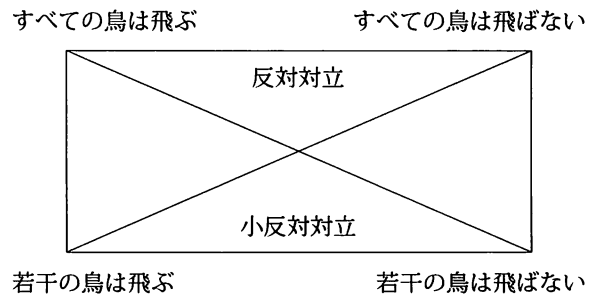
これを石川文康があげる分かりやすい例を使って見てみよう。わたしたちは、方位を知るために、北はどこかということから考えはじめることが多い。はるか北極が、どの方向に位置するかによって、その反対側が南であり、北へ向かって右手が東で左手が西であるというように、方角を知ることが可能になる。ところが、もしわたしが、北極点に立っていたとしたらどうだろう。

一見、どの方向もすべて南といえそうであるが、それは単に名目上だけのことである。なぜなら、すべてが南であるということは、もはや「南」という概念自体が意味をもたなくなるからであり、その場合なによりも方位という概念自体が意味を失っているからである。方位の極限においてはもはや方位の概念は破綻しているのである。これを象徴するかのよう、極点においては實際上、それまで方位の示し

ていた磁石は機能しなくなる<sup>5</sup>。

ここで、北極は東西南北という認識のパラダイムがうまく働くための、究極の後ろ盾であると言える。わたしたちが、方位によってものごとを認識するための「第一原因」となるものである。もちろん、南極を基準としてもまったく同じことは言えるが、要するにここで大切なことは、理性によるわたしたちの認識や理解のはたらきは、必ずなんらかのパラダイムもしくは知の枠組みにもとづいており、こうした仕組みそのものを支えているところの論理的な原因・根拠となるものにおいて、この「枠組み」自体が意味をなさなくなってしまうということであると石川は説明する。人は、見間違えるという経験をとおして、あまりにも視覚にたよることをしなくなる。聞き違えることがあることを知っているから、文書によって記録を残そうとしたりする。つまり、感覚というものはあてにならないから、最終的には、理性によって論理的に考えることによって、ものごとを見極めることができる。わたしたちは信じている。ところが、「アンチノミー」による一連の証明によって、カントは、まさに理性が錯誤におちいる場合があることを指摘したのである。

石川は、「アンチノミー」の概念を用いたカントの理性批判を、四つの「対立」の図式を用いてうまく説明している<sup>6</sup>。



真の矛盾においては、どちらか一方が必ず「真」であるため、他方が「偽」であるとしたら、もう一方の正しさを証明することができる。例えば、「すべての鳥は飛ぶ」という命題に「若干の鳥は飛ばない」という命題が対立しているが、この場合前者が間違っていたとしたら、後者のほうが必ず正しいのである。また、「すべての鳥は飛ばない」と「若干の鳥は飛ぶ」という二つの命題の関係も、同じく真の矛盾であると

いうことができる。上の図でいえば、対角線であらわされる二つの関係は、どちらも真の意味での矛盾であり、これらを「矛盾対立」と呼ぶ。

さて、それ以外の矛盾のようにみえる二つの対立関係についても見てみよう。まず、「反対対立」と呼ばれる第一のアンチノミーの場合がある<sup>7</sup>。図の長方形では上の辺にあたる、「すべての鳥は飛ぶ」という一方の命題と、「すべての鳥は飛ばない」というもう一方の命題の二つとも、ともに「偽」であるようなケースである。これは、本来の意味での「矛盾」ではない。対立するように見える二つの命題のいずれも誤りであり、これら二つの命題は、ある意味で矛盾以上の対立関係におかれているといえる。このとき、もし「すべての鳥は飛ぶ」という命題が「偽」であるからといって、「すべての鳥は飛ばない」という結論にいたったとしたら、まさにわたしたちが錯誤へとみちびかれてしまったことになる。

さらに、「矛盾以上」の対立が考えられるとしたら、「矛盾以下」の対立もまた考えることができる。これは、「小反対対立」として知られる二つめのアンチノミーである。これは、図の長方形の底辺にあたる「若干の鳥は飛ぶ」という一方の命題と、「若干の鳥は飛ばない」というもう一方の命題の、いずれもともに「真」であるようなケースである。この場合は、命題の一つが正しいからといって、他方が間違っていることにはならない。

以上のアンチノミーの説明は、「鳥」という生物学的に比較的限定が容易な分類にもとづいているため分かり易いが、これを、実体のあいまいな「国家社会」というような全体概念に置き換えて考えてみよう。すると、たちまち、カントが例証するところの、「丸い四角はまるい」と「丸い四角はまるくない」というような一見矛盾対立のように見えて実はそうではない、いずれの真偽も決して証明できないような対立へと、わたしたちの理性は追い込まれてしまうことになるだろう。純粋に理性の守備範囲にとどまりたいと考えるなら、「国家社会」などというものには実体は存在しないから、いかなる特性もこれにぴったりとはあてはまらないと言わなくてはならない。

## 国家イデオロギーとヤポネシア論

それでは、「国家社会」の概念などは、「形而上学」

にあたるから観念できないなどという、人は安閑としていられるのであろうか。もちろんそうではない。これをどうしても実体として浮かび上がらさねばならないと考えるからこそ、わたしたちはイデオロギーなるものを必要とするのである。島尾がヤポネシア論を通して考えたかったのはまさに「日本とは何か」という、日本国家社会の根本をなす疑問であった。

われわれは日本人です。だから日本人あるいは日本のことをすっかり知っているかというところでもない。端的に言えば、ほとんど日本のことを知りません。ところが日本人ですからやはり日本のことを知りたいと思うわけです。そこで日本を知るためにいろいろ方法はあると思うんですが、そのひとつの手がかりが、奄美にあると感ずるわけです。<sup>8</sup>

島尾は、長らく奄美に居住することになったが、彼がそこで見いだしたのは本土社会からまったくかけ離れた異質の実体としての「奄美社会」などではなかった。イデオロギーは象徴的構築物であるため、言語を通してはたらしき、また言語と同じようにはたらく。日本語によってまったく言い表すことのできないものごとがこの宇宙に存在しないように、国家イデオロギーとしてのヤポネシア論に従い日本を考えようとするような場合も、完全に表象不可能な外部によってではなく、人は内部にありながらうまく言葉にできないような部分に光をあて、その反射の効果として自らにアイデンティティを与えようとする。すなわち、境界線の向こうにある世界ではなく、境界線そのものを明確化しようとする作業がこれにあたる。自らのうちに異質な部分を、まったくの外部としてではなく、「内」でありながら「外」でもあるような差異そのものとして浮き上がらせようとするのである。「日本とは何か」というすぐれてイデオロギー的な問いを胸に、島尾が奄美にみたと信じたのも、まさにこうした「日本であって日本ではないような」ところであった。

思想家スラヴォイ・ジジエクは、ナチス・ドイツのもとでの、ユダヤ人迫害を同様の視点から分析している。第二次大戦中、ナチスがアーリア人の純粋性を強調すればするほど、ドイツ社会を内部から腐敗させてしまう存在としてのユダヤ人の危険性に人々の注意が向けられていったが、興味深いのは、このときもやは

りユダヤ人はまったくの異邦人としてではなく、非常に両義的な存在としての表象を受けたということである。曰く、ユダヤ人は狡猾で金儲けがうまい反面、実は無知で生活はすさんでいる。また、われわれドイツ人と見分けがつかないほど社会にとけこんでいるように見えて、実はわれわれとは似ても似つかない本性を隠している、云々。こうしてあらゆる社会問題の根源に、ユダヤ人の影が見いだされていってしまう。実際には、もちろんユダヤ人が原因でドイツは社会的困難を抱えていたのではなく、ナチス支配秩序の完全性をいいつくろうために、これに従属しない異端としてのユダヤ人の存在が必要とされていたのである。いかなるイデオロギー秩序も完全ではありえないから、あらゆる問題をユダヤ人と結びつけ、彼らを物理的に社会から排除することによって、来るべきドイツの勝利を人々に確信させることにした。あらゆる国家主義思想がそうであるように、ナチスのイデオロギー秩序も実は内部破綻しているということを隠蔽するためのアリバイとして、ユダヤ人は問題視されてしまっていた。国家イデオロギーは、自らがいつもすでに機能不全に陥っていることを、実はちゃんと承知しているのである。「ユダヤ人問題」は、それを人びとが気づかないようにしておくための政治的布石であったのだ。

もちろん、ヤポネシア論が、ナチスの国家イデオロギーと同じ民族浄化プログラムを内包していたというようなことがいいたいのではない。たとえば、ナチスのイデオロギーが排他的であるのに対し、ヤポネシア論は包摂的である。しかし、両者は、やはりともに国家イデオロギーであったのであり、これをよく認識することによってこそ、はじめてその間の違いを正しく理解できる。国家社会主義ドイツ労働者党が、差異化したユダヤ人たちをすべて強制収容所のガス室に送りこみ、社会問題の最終解決 — final solution — を目指すという「悲劇的」な道を選んだのにたいし、ヤポネシア論によって想定されていたのは、帝国主義によって抑圧されていた辺境の文化を日本社会に復帰させるという、いわば「喜劇的」結末であった。悲劇では、主人公が死ぬことによって、公共の秩序が浄化され回復される。喜劇では、ばらばらに崩れ去ってしまうと思えた秩序が、主人公同士の間を契機として、その多様性を温存したまま救い上げられる。島尾のヤポネシア論は、基本的にこの喜劇的モチーフに則して

語られていた。

人間社会というものをことばで理解し、これに表現を与えようとするとき、そこに必ずこぼれおちてしまうものがでてきてしまう。これが、「辺境」であったり、「マイノリティ」であったり、「女性」であったりする。そこで、東洋の知は、古来、大儀の座する日のあたる場所のかたわらに、いつでも暗くじめじめした情念の渦巻く空間を想定し、これを取り込んでいくことによって秩序が安定して保たれると考えてきた。ところが、イデオロギー秩序というものは、これに対立するものをすべて排除することによって樹立されるものであるから、排除された部分を加えることによって全体性を回復するといっても、この身ぶりそのものが、まさに排除のそれと同一不可分なのである。

確かに、島尾は、琉球弧が日本の歴史の中ではたしてきた役割を強調し、これら辺境の島々が不当に見過ごされてきたというが、だからといって、彼は、沖縄における彼の信奉者たちがとなえ始めたように、琉球弧こそが日本を対象化するカギをにぎっているというようなことを言いたかったのではない。彼のヤポネシア論をよく読めばわかるとおり、島尾は、奄美や沖縄は辺境であり、またそうであるかぎりにおいて日本にとって大切であるといっていたにすぎないのである。

こうして、島尾の琉球弧を見る目は、ついに支配者のそれか、おだやかにいうとしても本土からの旅行者のまなざしにとどまってしまった。大城立裕が「カクテル・パーティー」によって芥川賞を受賞したさい、島尾は「私の目には琉球弧は日本の中では受苦の度合いが深い場所として写る」と記し、「この地方の受苦は文学の母体だ。それは限りなくそのエネルギーを含んでいる」と抱負を語る一方、「ここを自分の場所として持ち得る特権が、ひとりの旅行者の私にたやすく与えられるものではない。私には何かが欠けている」とも言い足した<sup>9)</sup>。この旅人のいっけん悔恨にみちた独白に、優位にたつ者の慇懃なよそよそさもまた感じられないだろうか。

この南島にくらした作家のオリエンタリズムに満ちた日本文化史観が、なぜ復帰直前になって沖縄において広く受け入れられ、その後も沖縄の人々のアイデンティティ形成に大きく寄与することになったのか、今日のわたしたちは注意深く考察しなくてはならない。島尾は書いた。「日本の歴史の筋書きの中でさえも大

きな転換期に遭遇するときには……沖縄を中心にした南島のあたりが、まず、ざわめいてくる」<sup>10</sup>。こう記したとき、島尾は、みずからがこの「ざわめき」を生みだし、ヤポネシア論でつづった日本史の筋書きを、自作自演する結果になるということに、どれだけ気がついていたのだろうか。

### 「常民」という鏡 — 谷川健一のヤポネシア —

島尾のヤポネシア論に見られたこの「喜劇的」モチーフは、これを理論的に充実・発展させた谷川健一によっても踏襲されていった。復帰直前に急速に沖縄とのかかわり合いを深めていった谷川は、沖縄の知識層へ向かって復帰前に土着文化の独自性と革新性を強調し、自信を持って政治活動に邁進するよう熱心に励ましていたが、その彼もやはり「倒立した中央」としての「辺境」について語っていただけであり、振り返ってみると谷川の言論は、沖縄の本土復帰による祖国への再同化の流れを結果として後押しするものであったかもしれないとしても、今日にいたるまで漠然と考えられているように、これに真っ向から逆らうものでは決してなかった。谷川のヤポネシア論もまた、日本国家社会に象徴的境界線をもうけたいという願いに裏打ちされていたからである。

谷川が「ヤポネシア」としてイメージしていたのは「昨日も今日も明日も、飲み食い、騒ぎ、そしてそれ以外にかくべつ野心をもたない人々の渦巻く日本列島社会」<sup>11</sup>であった。「日本という国家の成立以前から存在し、日本列島に住民の生活があるかぎり存続する」<sup>12</sup>、いわゆる「常民」の社会に光を当てることが谷川のモチーフであった。「常民」とは、大日本帝国が大陸への軍事的介入をはじめたころに、柳田国男や折口信夫のはたらきで広まりつつあった民族学が、日本各地の辺境で見いだした近代化や軍国主義とはまったく無縁に見える人びとのことを指していった。村井紀は、ここに軍国主義ナショナリズムの醜く歪められたアリバイを嗅ぎ取っている。辺境の「常民」たちは、血塗られた大日本帝国とはまったくかけ離れたところに、遠い昔から日本列島に安住し、これからもまた生きのびていく人びとであるように描かれていた。しかし、民俗学が、農村や漁村などの遠隔地で、政治の垢にまみれていない純朴な人びとをみいだしたように感じたのは、そもそも社会の推進役となるべき若者

たちが満蒙開拓や戦争のために続々と大陸へ送られていたからである。この生々しい現実から目をそむけ、民間の興味深い伝承や言い伝え、こころ温まるエピソードなどを収集していくなかで、日本民俗学は帝国主義を民間学のレベルで暗黙に肯定し、植民地支配を背後から支えていたと村井はいう<sup>13</sup>。また、そのように辺境を描写することによって、民俗学は、疲れ果てた日本兵たちが戦後郷里に帰還し、そこに安住するためのこころやすまる「ふるさと」までをも用意することになったのである。

こうして考えるならば、民俗学が「常民」たちを軍国主義から免責したことは、終戦まで積極的に日本軍の行動に協力し、時には日本人以上に日本人であることを印象づけようと奮闘していた琉球弧の民衆の現実を、ヤポネシア論がまったく見落としていることとパラレルに考えていくべきだろう。そして、ヤポネシア論の影響の下で展開された、川満信一の民衆論や岡本恵徳の「沖縄の思想」においても、同じく民衆を戦争責任から免れさせたいという傾向が見てとれる。また、たしかに『『非国民』の思想と論理』の中で、新川は、皇民化教育に加担したとして伊波普猷の沖縄学を糾弾し、帝国主義を超えられなかったとして謝花昇の民権運動を批判する<sup>14</sup>。しかしこうした見解すらも、帝国主義下の地元エリートたちへ批判を加えたものであり、琉球弧の「常民」たちに直接、同様の痛烈な責任を問うものではなかった。

沖縄に谷川が求めたものも、また、いつまでも変わらない無垢で素朴な日本人のあるべき姿のようなものであった。近代国家日本を批判し、谷川は「通時的な『日本』にくらべてヤポネシアは共時的であり、また時間の垂直軸につらぬかれた『日本』にくらべて、ヤポネシアは空間の水平軸を志向するもの」<sup>15</sup>であると書いている。このとき、彼が指しているのは、「日本史」という大文字の物語である。縄文や弥生の太古から、封建社会をへて、近代日本の設立へとつながるような天皇を中心とした抑圧と排除の歴史観を、谷川は批判しているのである。

日本の各地方の歴史がそれなりの全体性をもって相対的独立性を持つことを主張することがまぎれもないヤポネシアの成立条件であるとすれば、その一方では、多系列で異質な時間を単系列の時間という一

本の糸により合わせていったのが「日本」であり、そのために支配層が腐心し、ときによっては糊塗と偽造をもあえて辞さなかったのが「日本」の歴史である。<sup>16</sup>

ここで、谷川が掲げているのは、日本内部における一種の多文化主義である。ということは、彼のヤポネシア論もまた多文化主義の思想全般がもつ弱点や限界性を内包しているといえる。まず問題点として指摘できるのは、谷川自身もはっきり理解していたように、いかに小さな共同体におけるローカルな歴史観といえども、それが支配体制維持のための表象である限り、彼のいう「単系列の時間」にもとづいて成り立っており、政治社会的な「糊塗と偽造」から自由ではありえないことである。もう一つは、こうした文化的価値相対主義のアプローチは、辺境に散在する各秩序と、これらを一本化する中央秩序とのあいだにある了解と協力にもとづく「ヘゲモニー」関係から目をそらし、一種の「弱者のポリティクス」へと向かって行ってしまうことである。

歴史変革の熱意につき動かされているように見えながら、琉球文化圏をその独自性とともにとりだすことが谷川のメヤポネシア論のメイン・テーマであったわけではない。彼の中にあっただのは、やはり島尾のばあいとおなじく、辺境を表象することをとおして「日本とは何か」という問いに答えを与えることであった。近現代史の荒波にもまれながらも、琉球弧に化石のように横たわる「原日本人」の全体性のようなものをよみがえらせることだったのである。

日本にあってしかもインターナショナルな視点をとることが可能なのは、外国直輸入の思想を手段とすることによってではない。ナショナルなものの中にナショナリズムを破裂させる因子を発足することである。それはどうして可能か。日本列島社会にたいする認識を、同質均等の歴史空間である日本から、異質不均等の歴史空間であるヤポネシアへと転換させることによって。つまり「日本」をヤポネシア化することで、それは可能なのだ。<sup>17</sup>

こうして、谷川は、日本文化社会——「ナショナルなもの」——の内部にとどまりつづけることを自ら宣言

する。

もちろん、ここで彼のこうした選択そのものがまったくの誤りであったと言うわけではない。たとえば、「ナショナルなもの」の外にでていき、明確に独自性をもった他文化との関係で論じられるように見える比較文化の試みもまた、究極的にはオリエンタリストの眼なごしを逃れられない。そればかりか、時としてこれにまったく無自覚なために、かえって見るもの（研究者）と見られるもの（研究対象）との支配関係を強化してしまいがちである。また、「ナショナリズムを破裂させる因子を発足すること」という谷川のアジェンダが、仮にとうてい実現不可能なようであったとしても、そのことによって、彼が日本人の民俗学者としての立場を選びとったことが、なにか思慮と誠実さに欠けていたことの証明になるなどと言いたいのではない。国家の支配体制というものは、つまるところ表象の秩序によって支えられている。だから、社会に内部から批判を加えていくという谷川のスタンスは、ヤポネシア論を彼流の「表象の弁証学」として考えるならば、きわめて正当な選択であったといえる。ここで、ほんとうに問題にされなくてはならないことは、谷川のヤポネシア論が、文化的「他者」としての「オキナワ」イメージを批判・解体するどころか、なぜかどうしても近現代史の帝国主義や民俗学が維持してきた「南島イデオロギー」を強化するようになってしまうことである。

### ヤポネシア論と「沖縄の思想」

岡本恵徳は、特に谷川のヤポネシア構想の影響を大きく受けながら「沖縄の思想」を展開した。そのため、岡本の土着志向と島尾や谷川のヤポネシア論には、興味深い相補関係を見いだすことができるし、彼自身が、自分の考える「沖縄の思想」は、ヤポネシア論と「ちょうど逆の発想になる」<sup>18</sup>と記していることも見逃せない。また岡本は、自身にとっての「沖縄の思想」は、「自分のうちに他者と共通する要素を見出し、他者の中に自己を見出そうとする個人的な営為の結果出てきたもの」<sup>19</sup>であると言う。つまり、ヤポネシア論が琉球弧に「他者」を見いだそうとしたこととちょうど反対に、岡本は、自分にとって「他者」であるヤポネシアのなかに自分を見いだそうと努めたということであろう。端的にいえば、復帰直前、岡本たち知識層の多

くは、ヤポネシア論の中に表象としての沖縄の可能性を垣間見たのである。

「ヤポネシアは空間の水平軸を志向する」という谷川の示唆をそのまま受け入れるかのように、岡本は琉球弧の共同体意識が、「水平軸の発想」によって支えられているとして自説を展開する。岡本によれば、沖縄の島々に存在する共同体は、個人レベルの意志のかかわりあいによって成り立っている。この内部では、「共同体的意志」そのものもまたコミュニティの成員を束縛する上からの規範としてあるのではない。成員それぞれの「個人的意志」のあいだに起こる「平行と複合」をとおして「秩序感覚」を学んでいくなかで確認されていくのである。「共同体的意志」とは、岡本にとって「共同体成員の平衡化された『秩序感覚』の複合体」に他ならないからである。<sup>20</sup>

大切なことは、岡本がここでいう沖縄型の「共同体的意志」を西洋近代国家型のそれと対比しつつ論じていることである。岡本によれば、近代国家型の秩序は、「個人が意識的無意識的にとる行為の原理、あるいは個人の行為の是非を判断する価値の基準が、内面的な規範となったところの〈神〉や主体的に獲得した論理(思想)」<sup>21</sup>にもとづいて機能している。つまり、個人を超えたレベルで「神」、さまざまな主義や思想、あるいは「天皇」のような観念が、いったんは成員一人ひとりからはなれて客観的に正しい社会規範であるとされ、その後これを成員たちが各自行動規範として内面化していくわけである。これと比べると、島社会にみられる共同体レベルでの統一意思は、違ったふうに形成されていくと岡本は論じる。

絶対的規範としての〈神〉も、「共同体的意志」の現実化されたものとしての〈神〉も持ち得ない現在の「共同体」においては、個人は具体的な人間関係のなかにおいてしか自己をとらえることはできない。そこでは、他の共同体成員とのかかわりのなかで、自己はどのような「位置」(親しいかどうか)をしめており、他の成員との間にどのような「距離」(親疎の度合いなど)を持っているか、ということによって、自己を外からとらえることを通して確認するのである。帰属する「共同体」がかわれば、「位置」も「距離」もかわるのであり、個人は、そういう、さまざまな「位置」と「距離」の複合した

ところで自己を確かめるわけである。<sup>22</sup>

この共同体の中では、人びとの関係は「自己のまわりに、一定の『位置』と『距離』を持った他者の拵がり(個人を中心とする同心円ふうな拵がり)として実感される」<sup>23</sup>。「そこでは人間関係は、支配・被支配などの上下関係としてよりも、『位置』と『距離』が自分に近接しているかどうかのかかわりとして、より強く機能しているようにみえる」<sup>24</sup>と岡本は言う。

以上が、岡本の「水平軸の発想」の骨子である。岡本は、国家やその規範にあるとされる実体的価値を批判しつつ、これに土着の共存性によって特徴づけられる相対主義的な社会関係のようなものを対置することによって、沖縄の共同体の特異性を示そうとした。こうした考え方は、ヤポネシア論にみられた日本近代国家再生のビジョンを継承しながら、沖縄という文脈の中で焼き直したものである。こうして近代国家日本は、天皇を中心とした絶対的・全体主義的価値秩序の中で、辺境・沖縄の社会と人びとを踏みにじってきたとされたが、岡本はその原因を、西洋近代社会に共通してみられる上下支配関係にもとづく共同体の成り立ちに見いだした。岡本は、こうした支配を前提とした社会秩序と好対照をなすものとして、沖縄の「共同体的意志」や「共同体的生理」を論じていたのである。

それでは、水平軸の人間関係にもとづくとされる伝統的な沖縄社会の内部には、支配関係や差別はいささ存在しないのか。日本人ジャーナリストの石田邦夫は、沖縄を取材したルポルタージュの中で、本土から差別されている沖縄社会内部にもやはり差別構造が存在することをつきとめ、これを「被差別の中の差別」としてレポートしていた。これを受けて、岡本は、確かにそうした差別を生み出すものが島社会の「生理」の中に存在すると認めつつ、この「被差別の中の差別」という現象は、「共同体的生理」にとって「本質的な機能ではなく」、外部権力による圧力や干渉が、共同体にとって単独では堪え難いほどに増大してきたときにはじめて「その抑圧を肩がわりする対象を見いだそうと図る」<sup>25</sup>ために起こることにすぎないとした。これにより、社会関係の座標軸上でより遠い存在とされ、かかわりあいの度合いがより少ないとされる個人や集団に、国家など外部からの抑圧のしわ寄せが及んでしまうと岡本は論じる。したがって「『共同体的生理』は

本来差別を生みだす根拠ではないので、共同体に加えられる外的な力が共同体自体において克服しうる場合には、むしろそういう差別というのは、殆ど起こらないと考えてよいだろう<sup>26</sup>と岡本は記している。

しかし、これではあまりにもナイーブすぎるのではないだろうか。南島のパラダイスにヤマトから悪い倭人がやってきたというこのシナリオは、ニライカナイ信仰とちょうど反対のことをいうような筋立てである。そして、これはまさに岡本自身の見解によって疑わしいものであることを明らかにできる。共同体に属する個人一人ひとり、実際にかかわりあう中で「秩序感覚」が芽生え、これがさらに複雑に寄り集まり、最終的にはバランスを獲得し、統一した「共同体的意識」にまで高められていくと岡本は論じているが、これが実は「一種の“自己規制力”をともなって外化される」とも彼は付け加えている<sup>27</sup>。つまり、岡本の批判するところの上下支配を旨とする国家秩序にしても、彼の擁護するところの同心円を描きながら水平に広がる社会的ネットワークから成る島々の共同体にしても、社会規範が従わなくてはならないものとして、構成員間で客観的に認識されるという点ではまったく同じなのである。これが疎外化や擬人化を被り、「天皇」と呼ばれようが「按司」と呼ばれようが、基本的なメカニズムは同じだと考えたほうが分かりやすい。

また、この島の「共同体的生理」が、明治以降うまく「国家意思」にすりかえられたことによって、沖縄の人びとの郷土を愛しこれを守り近い人びとと共に生きようという願いが、軍国主義の思うままに「換骨奪胎」を被り、天皇への忠誠と奉仕へと変質し、ついには「共死の思想」という形で現実化することになってしまったと岡本はいうが、ここでもまた、なぜ水平軸の社会秩序が垂直軸のそれへとやすやすと変容させられたのかについて、彼は十分な考察を加えていない。ここでは、むしろ「共同体的生理」も「国家意思」も、実はまったく同じメカニズムによって働くと考えられないだろうか。だから、琉球処分により、琉球の秩序が明治日本の秩序により変化を被りつつ取り込まれることが可能だったのである。支配のイデオロギーというものでは、どんな社会においても過酷な現実を完全に解明し解消しつくすことはできない。したがって、ここで起こったことは、琉球王国秩序の必然的に抱える縛りや軋みが、明治日本の新しくより大きな制限と

矛盾によって置き換えられたということである。事実、岡本もまた、神島二郎著『近代日本の精神構造』を参照しつつ、こうした国家による「共同体的生理」の組みかえを「本土の各地方においてみるができる<sup>28</sup>」と認めている。

ということは、明治期までには、沖縄県にしる日本の他の地方にしる、前近代秩序における縛りや軋みは、もはや堪え難いほど古臭いと感じられていたと考えられる。こうした流れの中で、新たな秩序が「外」からもたらされることを人びとは望んでいたに違いない。この意味では、海の向こうから幸せがやってくるという古来のニライカナイ信仰のほうに、はるかに現実味が感じられないだろうか。ニライカナイ信仰によれば、外部からくるものは本質的に「善」とされる。これと対照的に、岡本の「水平軸の発想」は、外部からくるものは本質的に共同体内部の秩序を崩壊させかねない脅威であり、「悪」となりうることを強調している。だが、岡本の言う「沖縄の思想」は、実はこの二つを同時に考慮にいれなければ理解できない。つまり、沖縄の「境界」としての本土は同時に「善」でもあり「悪」でもあるような存在として表象されてきたということだ。これは本土社会が、沖縄社会とは異なる、何らかの実体として存在しているのではなく、純粋な差異として認識されているということである。言うまでもなく、本土を相対化しようとしながら、岡本の「沖縄の思想」もまた、ヤポネシア論からくるオリエンタリズムに同じように貫かれており、何よりもヤマトを沖縄の境界としてこちらがわから表象したいという、ひとつの転倒した支配欲をここに見るべきである。

### 逆向きのヤポネシア論

谷川の影響の下、岡本恵徳は多文化主義的な日本の姿を思い描いていた。「差別の根拠を、論理的に対象化することなく、『本土』と沖縄の文化や社会構造の質的な差異に求め、一方的にみずからの側を価値的に低いものとするところに、差別と劣等感の結びつく根拠があった<sup>29</sup>」と彼は記している。このことばから、非常につきはなして考えるならば、文化的価値相対主義をつらき、ローカル・カラーを残したままであれば、本土に包摂されてもよいというのが、本土復帰前の岡本や他の反復帰論者たちの本音であったのかもしれない。新川をはじめとする反復帰論者たちは、一般の人



たちがうまく中央政府の手玉にとられていると批判したが、他の県民たち同様、もしこれら反復帰論者たちに「帰るべき祖国」があったとしたら、それはさまざまなマイノリティの文化が手に手をとって、お互いに排除することなく共存するような日本列島国家「ヤポネシア」であっただろう。「擬制としての『近代』」を拒絶し、地方の異質性をそのまま生かすことに、沖縄の可能性のひとつの方向が見出せる」<sup>30</sup>と岡本は記している。

だが、ここで「沖縄」とよばれている異質な地方とは、どんなところだろう。「日本とは何か」というヤポネシア論者の問いが、「沖縄とは何か」という沖縄の人たちの問いとして受け入れられていくプロセスの中で、どんな表象の詐術が用いられたのか。まず、岡本の描いた近代国家「日本」は、ヤポネシア論の中の「中央／辺境」という二項対立の図式をそのまま受け継ぎつつ、これを反転させ、沖縄がわの視点から書きなおしたものであった。こうして、沖縄にとっての「ヤマト」はあこがれと嫌悪の対象として見いだされるが、これはヤポネシア論がその母体である「南島イデオロギー」から受け継いでいたオリエンタリズムの眼なざしと、認識論的にいってほとんど同じ性質のものであることを示している。唯一の大きな違いは、オリエンタリズムが中央から辺境へ向けられた支配欲につらぬかれているのに対し、沖縄からのそれは反転し屈折した支配欲である「弱者のポリティクス」にもとづいているということである。

また、岡本は「沖縄」を復帰とともに失われていく地方文化社会として描いた。ここで、復帰という、今ここにある危機にみまわれた貴重な文化圏として沖縄を描く岡本の眼なざしは、ヤポネシア論のそれとまったく同一のものだ。つまり、この二番目の意味では、岡本は日本人として「沖縄」をながめているのである。こうして、岡本の「沖縄の思想」は、ヤポネシア論が提示した「日本であって日本ではないようなところ」という日本人にとっての「他者」を銜いながら、辺境に生きる自分へのオマージュをみごとに謳いあげて見せるのである。

## おわりに

復帰後の今日、沖縄の文化・社会が失われてしまうだろうという岡本の危惧は現実のものとなっているだ

ろうか。一方では、確かに、冠婚葬祭のヤマト化から、ファーストフード店やコンビニエンス・ストアの進出にいたるまで、資本主義の圧倒的勢力の前で、本土への同化は飛躍的に進んだと言えるだろう。しかし、他方では、観光業の隆盛をはじめとして、商業主義の着実な浸透とともに、これまで沖縄は本土との新たな差異をつぎつぎと産みだし、これらを商品化することにも成功してきた。さまざまな面で実質的には本土と均質化してしまった沖縄が、復帰とともに今度は「オキナワ」という表象の衣をまとい存在しつづけている。岡本や新川など反復帰論者たちにとっては、まったく不愉快な言いがかりのように聞こえるかもしれないが、近代初期の「南島イデオロギー」からヤポネシア論を経て、本土復帰のころ知識層に内面化されていったオリエンタリズムの眼なざしによってこそ、このことが可能となってきたのである。

日本文化社会が、象徴的な国境を必要とするかぎり、批判精神のアリバイとして今後も「オキナワ」イメージは強化されていくように感じられる。表象空間に占めるこの沖縄独自のポジションは、復帰後35年を経てなお存在しつづける米軍基地の問題、教育やくらしの格差問題など、さまざまな現実の課題と重ねあわされて今後論じられなければならないだろう。しばしば反国家のスタンスをとり、他の都道府県とは比べられないほどの存在感を持ちながらも、戦後近代国家日本が保ち続けてきた政治的、思想的な枠組みそのものには、ほとんど根本的影響を与えないような奇妙なところとして沖縄はありつづけている。いま大切なことは、戦後セルフ・イメージを日本社会が模索していた頃、1970年代前半に行われた本土復帰を契機として、ヤポネシア論を受け入れることにより、辺境の「他者」としての役割を確かに自分たちで選び取ってしまったのだということを、わたしたちがしっかり認識することである。この政治文化的「他者」としての役割は、今日にいたるまでわたしたちに過剰に求められているからだ。

だが、復帰以後、中央政府や文化秩序の完全なる支配から逃れ、思想の自由を獲得するため、沖縄にとってヤポネシア論はほんとうに不可欠だったのだろうか。今日にいたるまで、ちょうど復帰前に岡本や新川が抱いていたと同じ異質感と差意識が、たやすく名指すことのできないわだかまりとしてまだわたしたちの心に

漂いつづけているのではないか。自分が現実には沖縄にいながらにして、これまで「オキナワ」という民俗学的表象の王国へと「亡命」<sup>31</sup>してきていることに、わたしたちはそろそろ気づきはじめていのである。そして「オキナワ」を求める人たちの眼なざしがほんとうにわたしたちにとっても必要なのか、これからはもっと真剣に考えはじめるだろう。

「オキナワ」を表象の海に沈めるときが、いつか必ずやってくるからだ。

## 註

- <sup>1</sup> 又吉栄喜、新城郁夫、星 雅彦 「鼎談 沖縄文学の現在と課題 — 独自性を求めて —」『うらそえ文藝』8号 2003年5月 p.32。
- <sup>2</sup> 「座談会 沖縄—ディストピアの文学」『すばる』2007年2月 p.175。
- <sup>3</sup> 同上、p.176。
- <sup>4</sup> 村井 紀 『新版 南島イデオロギーの発生 柳田国男と植民地主義』岩波書店、2004、p.339。
- <sup>5</sup> 石川文康 『カント入門』筑摩書房、2005、pp.47-48。
- <sup>6</sup> 同上、p.83。
- <sup>7</sup> 同上、pp.81-84。
- <sup>8</sup> 島尾敏雄 「わたしの見た奄美」『ヤポネシア序説』創樹社、1977、p.11。
- <sup>9</sup> 島尾敏雄 「大城立裕氏芥川賞受賞の事」『琉球弧の視点から』講談社、1969、p.173。
- <sup>10</sup> 島尾敏雄 「日本の周辺としての奄美」『非超現実主義的な超

現実主義の覚え書』未来社、1962、p.294。

- <sup>11</sup> 谷川健一 「ヤポネシアとは何か」『日本読書新聞』1970年1月1日。
- <sup>12</sup> 同上。
- <sup>13</sup> 村井 紀 前掲書、p.327。
- <sup>14</sup> 新川 明 「『非国民』の思想と論理 — 沖縄における思想の自立について —」谷川健一編『沖縄の思想 叢書わが沖縄第六巻』木耳社、1970、pp.5-72。
- <sup>15</sup> 谷川健一 「ヤポネシアとは何か」『日本読書新聞』1970年1月1日。
- <sup>16</sup> 同上。
- <sup>17</sup> 同上。
- <sup>18</sup> 岡本恵徳 「水平軸の発想 沖縄の『共同体意識』」谷川健一編『沖縄の思想 叢書わが沖縄第六巻』木耳社、1970、p.139。
- <sup>19</sup> 同上、p.139。
- <sup>20</sup> 同上、p.186。
- <sup>21</sup> 同上、p.181。
- <sup>22</sup> 同上、p.182。
- <sup>23</sup> 同上、p.182。
- <sup>24</sup> 同上、p.182。
- <sup>25</sup> 同上、p.184。
- <sup>26</sup> 同上、p.184。
- <sup>27</sup> 同上、p.186。
- <sup>28</sup> 同上、p.190。
- <sup>29</sup> 同上、p.153。
- <sup>30</sup> 同上、p.154。
- <sup>31</sup> 村井 紀 『新版 南島イデオロギーの発生 柳田国男と植民地主義』岩波書店、2004、p.339。

## A study of "Japanesia" Understood as an Ideological Concept.

Hitoshi Hamagawa

### ABSTRACT

The word "Japanesia" (pronounced as "yaponesia") was coined by a Japanese novelist Toshio Shimao to represent a key concept for rethinking Japan, not as a political and cultural body with a centralized imperialist government, but primarily as a chain of islands with a variety of lively boarder cultures and rich local traditions. This concept was further developed and imbued with some new theoretical insights by a Japanese ethnologist Ken'ichi Tanigawa whose thoughts have had a great impact on Okinawan writers and critics during the early 1970s, enabling them to form an intellectual stance against Okinawa's reversion to mainland Japan. The "anti-reversion" debate was led by Akira Arakawa, Shin'ichi Kawamitsu, and Keitoku Okamoto, all graduates from the University of the Ryukyus where they first became known in the mid-50s under the American military rule, publishing a leftist literary magazine, *Ryudai Bungaku*. With a focus on the writings of Tanigawa and Okamoto, this paper argues that the multicultural concept of "Japanesia" is built on the "center/border" opposition, and the way Okinawa is represented through such binary oppositions, however sympathetic and positive, is in fact nationalist as well as Orientalist. Shimao's and Tanigawa's thoughts on Okinawa, therefore, tend to reduce Okinawa to a local community to be absorbed again into the political and social order of Japan, as people actually saw it happen in 1972 later when Okinawa returned to Japan. This paper presents a critical discussion of the way in which Okamoto as a local critic responded to the concept of "Japanesia" and employed it to create his own thoughts in order to describe what he believed to be distinctively "Okinawan ways" as opposed to the mainland Japanese.